


特定非営利活動法人 日本免疫学会
 平成 30 年度 後期 **Tadamitsu Kishimoto International Travel Award**
 研究発表報告書

申請者氏名	山田恭央	会員番号	0035275	
申請者の所属・職名	慶應義塾大学大学院薬学研究所生化学講座・大学院生			
出席会議名	Keystone Symposia Microbiome: Chemical Mechanisms and Biological Consequences			
発表論文タイトル	Mucin O-glycans facilitate symbiosynthesis to maintain gut immune homeostasis			

この度は平成 30 年度後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award に選出していただき、誠に有難うございました。岸本忠三先生、選考委員の先生方ならびに推薦して下さった長谷耕二先生に厚く御礼申し上げます。また、上記の会議にて発表した研究内容は、「きぼう」プロジェクトにより支援されたものであり、岸本忠三先生をはじめとした日本免疫学会の諸先生方には重ねて感謝申し上げます。

本 Travel award の御支援の下、私は 2019 年 3 月 10 日から 6 日間、カナダ・モントリオールにて開催された Keystone Symposia “Microbiome: Chemical Mechanisms and Biological Consequences”に参加させていただきました。微生物叢（主に腸内細菌）の代謝機能およびその宿主への影響をテーマにした学会です。私はこれまで腸内細菌が抗炎症性代謝物である短鎖脂肪酸を産生するメカニズムについて研究してきました。しかしながらこれまで私は主に宿主免疫系の解析をメインに行なっており、細菌代謝については初心者でした。そこで、細菌代謝研究の最前線を学ぶと共に、本分野の専門家とディスカッションをしたいと考え、本学会に参加させて頂きました。

学会開催期間中、刺激的なディスカッションに加え、先進的な研究、新たな技術、視点に触れることができ、極めて有意義な期間を過ごすことができました。申請者の研究対象である多糖類や短鎖脂肪酸に着目した研究は想像より遥かに少なく、低分子化合物の産生機構や、薬物代謝、細菌代謝機能の網羅的解析法にフォーカスしたものが多く印象でした。これは予想外のことでしたが、腸内細菌学の潮流のように思われ、本学会に参加した意義を感じられました。

本学会に参加した中で印象的だったのは若手 PI の活躍でした。分野が比較的新しいこともあるかもしれませんが、本学会の Organizer 達すら 30 代頃に見られました。彼女ら/彼らの研究は、今後の腸内細菌学の方向性を示すような、先駆的なものに映りました。博士課程終了後、彼女ら/彼らの年齢に達するまで、そう長い期間はありません。このことを再認識し、身が引き締まる思いでした。

この度は貴重な体験をさせて頂き誠にありがとうございました。この経験を活かし、今後も免疫学 - 微生物学の発展に向けて精進して参ります。